

【ATC フィロソフィー③】

こんにちは、アークテックコム株式会社で、技術書類の作成と翻訳を行っています豊原 信です。

Tel : 050-6864-6201

Fax : 050-6864-6202

E-mail :

m.toyohara@arcteccom.jp

判断力と断行力

今月は引続き弊社のフィロソフィー（考え方）と応援メッセージの紹介です。

有意注意で判断力を磨く

目的を持って真剣に意識を集中させ、真我に取り込むことを有意注意といいます。傾注とは異なります。

私たちはどんなときでも、どんな環境でも、どんな些細なことであっても気を込めて取り組まなければなりません。最初は非常に難しいことのように思えますが、日頃、意識的にこれを続けていると、この有意注意が習慣になってきます。そうなれば、あらゆる状況下で気を込めて現象を見つめ、真摯に雑念や妄念のない状態で取り組むという基本ができて、そのものの本質を掴み考えることができるようになります。そのため正しい判断が即座にできるようになります。

物事をただ漫然とやるのではなく、私たちは、日常どんな些細なことにでも真剣に注意を向ける習慣を身につけなければなりません。

この「有意注意」とは、意をもって意識を注ぎ、あるいは目の前のものを心にとり込むことで、意識して注意を向ける傾注とは異なります。これに対応するのは「無意注意」であり、例えば、どこかで音がしたので反射的にフツと振り返るといった意識の使い方を言います。そのような気の注ぎ方ではなく、自分から能動的に一生懸命意識を集中させる、これが「有意注意」という言葉の意味するところです。

例えば、「これくらいは、たいしたことではない」と、あまり深く考えずに聞き流してしまい、疎かにする習慣が付いていると、正しい判断が瞬時にできるようにはなりません。

どんなに簡単に思えることでも、真剣に考え、正しい判断が

できるように努力しようと決め、どんなに些細なことでも真剣に考えることが必要です。

インドのヨガを極めた賢人の中村天風は、「有意注意の人生でなければ意味がない」と説いています。更に「研ぎ澄まされた鋭い感覚で迅速な判断をするためには、どんなに些細だと思えるようなことでも、常に真剣に考える習慣をつけていなければならない」と言っています。

どんなに些細なことでも、真剣に考えるような人は、感覚が研ぎ澄まされていますから、いつでも迅速に、的確な判断が下せるようになっています。ですから、問題を聞いた瞬間に「あ、それはこうすればいい」とわかるのです。それは、過去に同じような経験をしたから、特に考えなくてもわかる、ということではなく、ものすごい速さで思考が回り、最良の策を考えつくことができるからなのです。

それは頭の良し悪しに関係なく、どんなに些細なことでも真

剣に考える習慣によって可能となるのです。最初のうちは頭の回転も遅く、あれこれと迷いながら考えていても、それを 10 年、20 年と繰り返しているうちに、すばらしい冴えを発揮できるようになってきます。

有意注意できる環境を作る

時間が無いからとか、いい機会だからとかで、たまに会社の廊下でばったり会えばこれ幸いと相手をつかまえて、「この前の件ですが」と切り出す人がいます。これは非常にマズいのです。自分の都合で、相手のことを考えないで、相手を巻き込むことになります。相手の注意は他の方に向いているわけですから、これは中々「有意注意」にはならないのです。そのようなときは、相手の方は大体いい加減な応答をしているものです。それが往々にして、後でたいへんな問題を引き起こすことになります。廊下やトイレで簡単に相談に乗るということは絶対にしてはいけません。そして、「相談事なら、とにかく集中できるところで話しましょう」と提案し、話を聞くときは、すべての意識を集中させなければならないのです。何かのついでにちょっと話を聞いて軽く判断を下す、ということは決してしてはならな

いのです。

公私のけじめを大切にする

会社の使命（経営の目的）に向かって、仕事をしていく上では、公私のけじめをはっきりつけなければなりません。

プライベートなことを勤務時間中に持ち込んだり、仕事上の立場を利用して取引先の接待を受けたりすることは厳につつまなければなりません。さらに、私たちが心していなくてはいけないことは、卑なる人間、賤しい人間を、会社の中で育てないことです。人間の中で一番レベルが低いのは、「卑賤な人間」です。

私用電話の受発信を禁止したり、仕事を通じてのいただきものを個人のものとせず、みんなで分け合ったりします。これらの些細な公私混同はモラルの低下を引き起こし、ついには会社全体を毒することになってしまうからです。

私たちは、公私のけじめをきちんとつけ、日常のちょっとした心の緩みに対しても、自らを厳しく律していかなければなりません。

そのためには、厳格過ぎるくらいに、公私の区別をはっきり

と判断できる知性を身に付ける必要があるのです。

盆暮れに送られてくる仕事を通じてのいただきものは、会社全体でまとめて、全従業員で分けるようにします。そして、一切個人として受け取ることをないよう行動します。本来なら全部断るべきなのでしょうが、それでは角が立ち過ぎるという場合もあります。それならば、会社として頂戴し、全従業員で分けるようにするのです。この考えが会社のモラルを守っていきます。公私の区別をするルールは、厳しくしても厳し過ぎることはないのです。

また、会社の立場を利用して個人的に利益を得るということは、仲間に対する「背任行為」です。お互いの信頼をベースとした経営を目指し、従業員同士の結び付きを大切にするには、この「公私のけじめ」は非常に大事な考えです。

※2025 年 12 月号に続きます。

今月の応援メッセージ

悪人ばかり

世の中、善人ばかりだと決して上手く行かないのをご存じですか。揉め事や戦争など決してなくならないと思います。変なことを言い出したと思われるかもしれませんが、世界中を見てください。善人ばかりです。ここ数年はウクライナや中東に集まっていますね。

あの中村天風の文章に面白いものを見つけました。紹介します。

【悪人と善人】

いつかある人が私に聞いたことがある。「先生のところには、どんなことがあっても、機嫌の悪い人という人を見たことが無いが、誰もがどんなことがあっても、お怒りにならんのはどういわけです？」と言うから、「それはね、僕のところはみんなね、悪人ばかり多いからだよ」とこう言ったら、その人が目をまるくして、「先生のところは悪人だらけですか？」「そうなんだよ」まだ意味が分からないから、「どうゆうわけです？」と聞くから、「私のところじゃ、何か事が起こるだろ。そうすると、『あ、私が悪かった』とこう言う。誰でもいいか

ら、私が悪かったってことを言っ
て罪を背負ってしまうと、喧嘩
にならない。人が一言でも、
『あ、私が悪かった、そこにこ
れを置いたものだから、壊れた
のね』というふうに言っちまう
と、これ、喧嘩にならないよ。
ところが、あなた方の家庭だと、
善人ばかりだからいけねえ。何
か事があると、『私はいいのだ、
私は何も悪いことはしてないの
だ。あの人が悪いのだ』とこう
なるから、そりゃ好きに喧嘩を
やりだすものね」。

人格が高い人は決して相手や
他人を悪者にしません。いま世
界を見回して、国家の品格の高
いところは何処でしょう。考え
てみてください。

豊原 信